

# 幼児の中にあつて生きることに



津 守 真

最近、私は一連の幼児の絵をみていて気がついたことがある。その子どもは、五歳の後半になったころから、家の絵をよく描き、その家にはドアが描かれている。そしてそのそばに女の子が描かれる。このような絵が半年くらいの間に数多くかかれていますのである。

はじめのうちは、一枚の画面の上の家と女の子は相互に関連のない絵かと思っていたが、子どもと会話をかわしたり、その子の絵を何枚も見ているうちに気がついたことは、それは女の子が家から外に出かけていくことを描いているということである。家といっしょにかならず描かれるドアは、それを開いて外に出ていくという行為を示すものである。そして女の子は自分自身と考えてまず間違いがなさそうである。

この子どもは五歳になってから急に活発になり、友だちともよく遊ぶようになり、絵にあらわれているように外の世界に興味を

示している。そして、生活のいろいろの面で外向きの姿勢がみられるようになっていく。

私はこの一連の絵をみていて、絵に子どもの生活や態度があらわれるという意味でもしろいというのみでなく、子どもは絵をかくときにまで、自分が生きていく生き方に関心を示し、そのことに打ちこんでいるのを知って心打たれた。

幼稚園は子どもの教育の場であるというが、いったい教育の場というのはどういうことであろうか。おとなが子どもをいずれかの方向にひっぱっていかうと努力する場と考えてよいであろうか。そのような面はある。先生はそのクラスの子どもたちのことにいっしょけんめいになるし、先生自身は理想や目標を高く掲げていることはたいせつなことである。しかし、それより以前に、子ども自身、生きることを求めている。幼稚園は、子ども自

身が自らの生き方を求めて努力している場である。その努力というのとはおとなのように局限された意味ではないし、その求め方はことばや文字や観念的な思想によるものではない。もっと体ごとのことである。そのような子ども自身の努力を前提としてはじめて教育の場は成り立つのである。

幼稚園で子どもが口をきかなかったり、乱暴をしたり、いうことをきかなかったり、けんかをしたり、その他おとなにとって不可解とみえる行動をするのは、子どもが自らの生き方を求めているからともいえる。子どもは、自分がどうしたらよいのかを、子どもなりにさがし求めている。自分自身の生き方を求めているということにおいて、幼児も教師も共通である。

幼稚園の教師が子どもの中ではたらくということは、自分自身、人間としての生き方やあり方を求めていることが前提となっている。おとなとしての教師は自分の頭の中だからまわりすることが多い。しかし教師として子どもの中にあるときには、子どもという対象があり、相手があるから、自分のあり方をきめるのはより容易である。相手である子どもによりよく振舞うことができようということが明瞭な課題になるからである。

教師ということばは、児童や生徒に対する公的な役割を示す語である。一体、幼稚園の先生が、幼児の中における自分自身のこ

とを意識するときに、教師ということばで意識するとしたら、何かたいせつなものが落ちてしまうのではないだろうか。「せんせい」は、子どもと社会的な身分の違いを前提として振舞うのではなく、人間として共通な部分によって相互に理解しあうのである。幼児と教師は、それぞれ、人間として生き方を求めている人間と人間である。そこで教師は、相手の人間がよりよく生きることができるようということ、自分自身の課題として真剣にとりくむ人間でなければならない。

幼稚園の中には、根本から問題を問い直して考えていかねばならぬ問題がたくさんある。子どもがそんなに真剣にはじめての新しい人生を進もうとしているときに、おとなもまた真剣に、そこで問われている課題にとりくまねばならないと思う。幼児の生活環境のこと、教育の内容のことなどもある。音楽のように、教育の内容であるとともに養成機関の大きな問題であるものもある。職員間の人間関係や組織のように、目にみえないが重大な力をもつ問題もある。教育という語がよいのか、保育という語がよいのか、ほとんど同じものを指しながら、都合によっていろいろに使用されることばの問題もある。またその中であって、幼児に関する学問はどのようであつたらよいのか、私自身、最も関心のある課題である。